「轟は夢をのせて」
―喜・怒・哀・楽の宇宙日記

的川泰宣　著

共立出版株式会社，2005年３月，
366頁，1900円（本体価格）
ISBN 4-320-00566-X

「天気」編集委員会で本書の書評担当を決めようと話し合っていたとき，「気象とは関係ないから書評を『天気』に掲載する必要はないのではないか」という意見が一部の委員の間から出された．でもとりあえず検討してみましょうということになり，評者が担当となった．

上記の疑問に対する答えを簡潔に書けば，本書は気象とはほぼ関係がない．しかしながら，賛同できるかできないかはともかく，読者を考えさせるのに十分なメッセージを持っており，特に著者の宇宙開発をベースとした教育論などを読んだことがない方にはぜひ一読を勧めたくなる著作である．

本書は，1999年末に発足した日本惑星協会の会員に電子メールで配信された「マガジン」を，1999年12月からほぼ毎週，約５年分をまとめたものである．著者は現在，宇宙航空研究開発機構（JAXA）技術参与など，多くの肩書きをお持ちになり，JAXAやその前身によるロケットの打ち上げでは長年に渡って陣頭指揮を取り，地元との調整なども含めて強力に推進されてきた宇宙工学者である．また，子どもたちの教育にも非常に熱心であり，大人向けだけではなく，子ども向けの科学関係の雑誌などに啓蒙的な記事を多く書かれている．

本書の内容は日記やエッセイ，ロケット打ち上げのレポート，技術解説など，文章自体は気軽に読める内容である．この書評の最初に挙げた疑問に無理矢理に肯定的な答えをすると，１）気象観測や環境モニタリングでは人工衛星は非常に有用であり，そのためにはロケットによる打ち上げが欠かせない．２）本書で最初に取り上げられる自然現象は，重力波が熱圏まで上向きに伝搬することにより縞々模様がロケットなどにより観測されると考えられている大気光である．３）その日のメールマガジンの内容によって，副題にある「喜・怒・哀・楽」をそれぞれ，晴れ，雷，雨，星空など，天気のように表している，などが挙げられるが，そのようにわざわざ本書を気象と関係付ける必要性はないであろう．

本書において評者が非常に感銘を受け，一読を勧めたくなる理由は，著者には大変失礼な書き方になってしまうのだが，著者の大風呂敷の広げっぷりと，ウルトラ楽天主義にある．例えば，宇宙開発はこどもたちに多くの夢を与え，いわゆる「理科離れ」を止めるだけではなく，いのちの尊さを教えることにもなり，さらには国民的目標として，日本社会に蔓延する閉塞感を打破するのに役立つなどと論じている．また，ロケットの打ち上げが失敗したときなど，現場の失望感，悔しさなどもありありと書かれているが，それでも絶対に挫けず，必ず次回の成功を信じ，「日本での宇宙開発はもう諦めた方が良いのではないか」という納税者レベルから，学界，マスコミ，さらには国会にもよくある議論を，上記のような大風呂敷を広げながらズバズバと切り捨て，自信に満ちあふれた状態に戻っていく様子が読んで取れる．国家論など，多少きな臭いところも感じなくはないのだが，気象学界にこれだけ「夢」を全面に打ち出して気象学のさらなる推進の必要性を論じられる方がいらっしゃるだろうか？実はいらっしゃるのだが，さらなる活躍を期待したいところである．気象学は実学として期待されるところが非常に大きく，それはやぶさかではないのではあるが，最近では予測可能かどうかも分からないようなことまで予測することが求められてしまうことが多い．それとバランスするように学問，科学としての「夢」を，せめて自分自身の中にもう一度取り戻したいと評者は多いに反省させられた．また，かなりの悲観主義者である評者は，著者のウルトラ楽観主義に触れるにつけてさらに非常に反省しているところである．

次に，本書の欠点を少しだけ挙げておく．まず，ほぼ毎週，電子メールという媒体で配信されていたので，多少の繰り返しがあり，また，週によって極端に短かったり長かったりするため，少し散漫な印象があることは否めない．またその後，頸椎が損傷していることが判明した評者にとって１番困ったことは，本書が多少重くてかさ張り，持ち歩きに不便だったところである．もう少し気軽に読めるように新書判にでもして，紙の質も落とし，ついでに定価も大変下げていただければもう少し普及すると思われる．

ところで，評者が見た限りではどこにもクレジットされていないが，評者の目が確かであるならば，著者との親交が深い漫画家，松本零士氏による挿絵が非常

© 2006　日本気象学会

に少数ながら掲載されている．

本書を誰にでも勧めるものではないが，気軽に読め，もしかすると学問のあり方，その夢などに関して何かしら考えるきっかけになるうる著作として評した．

最後に，評者の怠慢により本書評が大変遅れてしまったことを，著者ならびに出版社，「天気」編集委員会，その他関係者に深くお詫びする．

（地球シミュレータセンター　大淵　済）